■論　文■

悩みへの否定的構え尺度の信頼性と妥当性の検討

植　松　晃　子*　高　城　絵　里　子**

抄　録

本研究では，「悩みへの否定的構え尺度」の信頼性・妥当性を検討した。本尺度は，専門家による心理相談のもつ特徴から，特に主訴の形成に関わる個人内要因に焦点をあて，自分の悩みの捉えにくさ及び悩みへの否定的認識を測定するものとして開発されたものである。今後，より広い対象に実施できるよう大学生 280 名と社会人 498 名を調査対象とした。確認的因子分析，多母集団因子分析から一因子構造が確認され，内的一貫性と再検査法により一定の信頼性が確認できた。さらに，心理的過程への関心や洞察の能力を測る心理学的心性と，自身の悩みとの適切な距離・保持の仕方や積極的な捉え方を測る悩み体験スケールとの関連から構成概念妥当性が確認された。これらの結果から，本尺度が自分の悩みに対する態度を明らかにするためにおおむね妥当な尺度であると示された。最後に本研究の限界と今後の展望が示された。

Keywords: 学生相談，悩みの捉え方，専門家への援助要請，信頼性・妥当性

Ⅰ．問題と目的

近年，公認心理師が国家資格として制定され，臨床心理の観点から対人援助を行う専門家の援助の制度化と周知が一層進んでいる。自殺率は減少傾向にあり，医療機関や相談体制の寄与も指摘される一方で，国際的にみて G7 の中で若い世代（15 歳～ 34 歳）の死因順位の 1 位が自殺となるのは日本のみである（厚生労働省，2019）。若年層の自殺率も他の年齢層と同様に少しずつ低下しているが，20 代，30 代は，40 代以降と比較して下げ幅が少ないとされる（厚生労働省，2020）。

何らかの問題を抱えた際に他者に援助を求めることは，被援助志向性や援助要請態度および援助要請行動として研究されており，大学生が自身の心理的問題を認識してから援助要請行動に至るまでの包括的なモデルも提案されている（木村，2017）。しかし，心理の専門家に対する援助要請は，問題の深刻度・重要度によって必ずしも増加

＊ Uematsu Akiko
ルーテル学院大学
＊＊ Takaki Eriko
ルーテル学院大学

しないことが分かっている（水野・石隈, 1999; Vogel, Wester, Wei, & Boysen, 2005）。また，自殺に対する保健管理センターなど大学内の施設の関与は低いとされ（内田，2010），高齢者に比べると心理的問題を把握し，援助要請を意図する大学生が多い一方で，自殺念慮を想定したケースであっても実際に援助を求めると答えたものは少なかった（木村・梅垣・水野，2014）。また，大学中退者を対象とした調査では，心理相談利用のニーズは高くても，実際の利用は少なかった（王傑・王帥・黄・藤森・日下田・谷田川，2016）。このように，制度が整えられ周知が進み，必要を感じてもなお，相談機関の利用に繋がらない理由の解明は，援助要請研究における重要な課題である。

これまでに様々な個人内要因が検討されており，援助要請行動の促進を進めるために心理教育的な働きかけなどのアウトリーチが重視されている。しかしまだ十分ではないとされ（Gulliver, Griffiths, Christensen, & Brewer, 2012），さらなる要因の探索や介入研究が求められているといえる。

まず援助要請行動が成り立つためには，自身の辛さや抑うつ感，悩みなどの心理的問題の認識が重要であり，さらにこの認識は，1回の相談もしくは継続的相談に関わらず，心理相談プロセスの最初にある「主訴」の形成につながっていく。自身の心理的過程の認識に関連が深い概念として，「心理学的心性（psychological mindedness; Appelbaum, 1973）」がある。これは，「人が自分自身の経験や行動の意味と原因を知ることを求めて，自らの思考，感情，行動の間の関係を理解しようとする力（Appellbaum, 1973）」として，精神分析の適用と効果的な予後を予測する要因であった。Hall（1992）はこの定義を踏まえ，感情や気持ちのような心理状態，ならびにそこから派生する心理的過程を振り返ることへの「関心」と「洞察能力」という2側面から心理学的心性を再定義した。辛さや悩みだけでなく全般的な心理的過程に焦点が当たっており，似た概念として情動知能やマインドフルネスがある。心理学的心性は，自身の心への「関心」を扱う点で情動知能を促進する要因であるとされ（Nyklíček & Denollet, 2009），さらにマインドフルネスや公的・私的自己意識との関連も示されている（Beitel, Ferror, &Cecero, 2005）。そして，心理療法のセッションの数（Cônte & Karasu, 1990），デイケアなどの外来患者の治療的成果（McCallum& Piper, 1997）と正の相関が報告され，心理療法ならびに心理的支援の成果および継続のための予測因とされる（高岸，2014）。このように自身の心理的過程の認識は，援助要請と，その後の心理的支援にも結びつく個人内要因として重要であるといえる。

また日本の学生相談の領域において，かねてから学生の「悩まない」傾向と「悩めない」傾向が問題視されてきた。この背景には，自分の心理的過程を認識できない「悩まない青年」の特徴のような，重篤な問題が隠れている可能性もある（下山，1994）。一方で，抑うつや自殺念慮を認識し，対処が必要と判断しても，実際に行動する学生は少ないことが指摘されており（木村ら , 2014）学生相談活動において，悩みを抱えても相談しない学生への対応は長年の課題である（佐藤，2019）。

小田（2000）は悩み体験の検討を通して，自身の悩みを認識できていても，悩みの捉え方が否定的な群に「悩まない，悩めない青年」の傾向が反映されていると推察した。また近年の大学生において「明るく元気に悩まないで生活することが強くて好ましい」と考え，悩むことを避ける傾向が指摘されている（鈴木，2010）。抑うつや自殺念慮のある大学生を対象にした調査では，問題を軽度なものと考えたり，一時的なものと考える認識の仕方が「援助を求めない理由」としてもっとも多く挙げられていた（Czyz, Horwitz, Eisenberg, Kramer, & King, 2013）。このように自分の悩みを避け辛さを軽視することには，悩みに対する否定的な捉え方が関連しているのではないだろうか。すなわち，悩むことをよくないものとして否定的に捉えてしまうと，「悩めない傾向」だけでなく，自身の心理的過程を顧みず「悩まない傾

向」を生む可能性すらある。そうなると，主訴の形成ならびに援助要請行動は困難になるだろう。また，学生相談などの心理的援助に繋がったとしても，継続的な利用が難しくなってしまうと思われる。

植松・橋本（2014）は，このような先行研究を踏まえ，悩みに対する否定的な捉え方は援助要請行動において注目すべき要因であると考え，自身の辛さや悩みを軽視するような否定的な悩みの捉え方を明らかにし，援助要請を促進するためのアウトリーチ対策に活かす必要があると考えた。そして大学生を対象として，自分の悩みを否定的に考える特徴を捉える7項目の「悩みへの構え尺度」を作成した。辛さや悩みについて否定的な捉え方をする傾向が分かれば，心理相談などの援助要請行動を促進する際に，どのようなアプローチが必要かを検討でき，また対象の特徴を把握し，早い段階で心理相談の中断を防ぐための働きかけに有効に使える可能性がある。また，本尺度は項目数が少ないため，対象者の負担を軽減してより簡便に実施できる利点がある。しかしあくまで探索的に作成されたものであり信頼性・妥当性の検討は十分ではない。

よって本研究ではこの尺度について再検討し，尺度の因子構造や信頼性の評価を行い，さらに構成概念妥当性の検討を行うこととした。本尺度のもとの名前は「悩みへの構え尺度」だが，どのような構えなのか内容を明確に示せるよう，今後は「悩みへの否定的構え尺度」とするほうが尺度の性質が理解しやすいと考え，本研究において名前を修正した。また，悩むことを避ける傾向は大学生を対象とした研究では注目されてきたが，大学生が該当する青年期に特有のものなのか，他の年代との比較によって明らかにする必要があると考えた。成人については，精神的成熟が進むためか悩むことを避ける傾向は指摘されておらず，青年期に比べこの傾向は低くなる可能性がある。一方で，30代の成人も自殺率の下げ幅が少ない群に該当しており，成人の悩みの捉え方の特徴を理解しておく必要があるだろう。よって本研究では大学生だけでなく，30代，40代の成人にも調査を行うこととした。また，日本人の対象者で心理学的心性尺度は性差が確認されており，女性の方が男性より高かった（Takagishi, 2020）。心理学的心性は広く自分の心理過程に注目するが，本研究で検討する尺度は「悩み」という本人には不快な心理過程にのみ注目しているため，同じような違いがあるのかを明らかにする必要があると考え，性別による特徴も明らかにすることとした。

統計分析の概要　本研究の分析には，SPSS statistics27 および Amos27 を使用した。因子構造については，探索的因子分析と確認的因子分析，多母集団因子分析を用いて尺度の構成を明らかにする。信頼性の検証については，内的整合性と再検査法よる尺度の信頼性の検討を行う。構成概念妥当性の検証については，心理学的心性尺度（Takagishi, 2020）と悩みの体験スケール（小田，2000）を用いることとした。心理学的心性が着目する感情や心理的過程は悩みや辛さに限らないが，本尺度は悩みや辛さといった不快な心理的過程に焦点が当たる点で違いがある。しかし，自分の悩みや辛さをよくないものとして否定的に捉えるならば，総じて自分の感情や心理的過程への関心や，それらを振り返るための力が低くなると考えられるため，負の相関が予測される。また，悩みを否定的に捉えて忌避する場合，小田（2000）の指摘するように悩みとの距離が適切でなく，悩み体験の肯定的で積極的な側面を捉えがたい傾向があるだろう。したがって，悩みの体験スケールとは負の相関があると予測する。なお各尺度の属性および性別ごとの記述統計は Appendix 1 に示す。

Ⅱ．方　法

調査対象

対象者は大学生280名（男性80名，女性200名）と社会人498名（男性238名，女性260名）の合計778名であった。学生の平均年齢は19.7歳（*SD*=1.17; range=18―23歳）。学年の内訳は，1年生78名（27.9％），2年生129名（46.1％），

3 年生 30 名（10.7％），4 年生 43 名（15.4％）である。成人の対象としては，大学生と比較することを考え，厚生労働省の年齢階級（34 歳―44 歳）を参考に，高校・大学等を卒業し 10 年以上経過している社会人を対象とした。社会人の平均年齢は 39.4 歳（*SD*=2.98; range=34―44）である。大学生に対しては，説明と質問紙の配布を行い，質問紙を後日回収した。社会人に対しては，調査会社を通して依頼をし，回答してもらう方法で質問紙調査を実施した。さらに，再検査信頼性の検証のために，「悩みへの否定的構え尺度」のみ 1 か月後の追跡調査を行った。全対象者のうち 105 名から回答を得た。

倫理的配慮

本研究の実施に際して，データは統計的に処理され研究目的以外には使用しないこと，また参加は任意であり成績等には関係がないこと，正しい解答や間違った回答はないこと，個人の意思でいつでもやめても良いことを，調査前に説明し，質問紙への回答をもって研究協力の同意とみなした。また，社会人対象者は調査会社から規定のポイントが謝礼として支払われた。なお，2019 年 11 月にルーテル学院大学研究倫理委員会の承認を得た。

調査内容

1）悩みへの否定的構え尺度　先行研究の観点を踏まえ，大学生の自分の悩みや辛さに対する発言にもとづいて，「悩みへの否定的構え尺度」として 2 名の臨床心理士が作成した尺度である（植松・橋本，2014）。7 項目で構成されており「あてはまらない」から「あてはまる」の 4 件法で回答する。得点が高いほど，悩むことを抑制し，避ける傾向が高いことを示す。

2）心理学的心性尺度　Nyklíček, & Denollet（2009）によって作成された尺度の日本語版 Balanced Index of Psychological Mindedness 尺度（Takagishi，2020）を用いた。この尺度は Hall（1992）の定義から作成され，多くの実証研究で用いられているが，日本人でも因子構造や信頼性および妥当性が確認された（Takagishi, 2020）。「より深いところから湧き出る感情は私のよき助言者だ」，「自分の気持ちや態度に関心が向く」といった項目で構成される，自分の内部で生じている現象や感情に注意を向けようとする「関心」と，「自分の内面で何が起こっているのかよく分からない（反転項目）」など，自分の内面に触れその現象について振り返る能力と関連する「洞察」の 2 因子構造が確認されている。本研究の対象者における信頼性係数は「関心（α=.75）」，「洞察（α=.78）」となっている。14 項目で構成されており，「あてはまらない」から「非常にあてはまる」の 5 件法で回答する。得点は総合得点で示され，得点が高いほど自身の心理への関心が高く，そこから洞察を得る力も高いことを示す。

3）悩み体験スケール　小田（2000）によって作成された悩みの主観的体験化過程を「捉え方（意義）」と「距離」と「保持」の点から整理した尺度である。「悩みがあってもそれについて考えすぎないようにすることができる」，「悩んでいても何とかなるという感じを持つことができる」といった自分の悩みと適切な距離を取りながら抱えておけることに関連する「距離・保持」と，「悩むことは意味があると思う」，「悩むことによって得るものがあると思う」といった悩みに対し肯定的な態度を示し積極的に取り組む「肯定的態度・積極的関わり」の 2 因子で構成される。本研究の対象者における信頼性係数は「距離・保持（α=.80）」と「肯定的態度・積極的関わり（α=.82）」となっている。29 項目で構成され「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの 6 件法で構成され，得点が高いほどこれらの性質が高いことを示す。

Ⅲ．結　果

因子構造の検討

因子構造の検討に先立ち，悩みへの否定的構え尺度について対象者全体のデータから，項目ごとの記述統計を確認した。天井効果などは確認され

Table 1 主成分分析結果とI-T相関

	全体					学生	社会人
	主成分	共通性	I-T相関	*M*	*SD*	主成分	主成分
3. 私は、自分は大変でも、我慢しておくべきだと思う	.77	.60	.66	2.58	(.89)	.81	.74
2. 私は、悩みがあることは自分の弱さの証だとおもう	.69	.48	.68	2.30	(.93)	.74	.67
5. 私は、自分のことより、他人の幸せを優先したほうがよいと思う	.64	.41	.70	2.36	(.91)	.63	.63
1. 私は、つらい時でもくよくよしてはいけないと思う	.59	.34	.71	2.55	(.91)	.55	.61
4. 私は、自分の悩みや弱さについて知らないほうがいい	.56	.31	.71	2.06	(.85)	.55	.60
7. 私は、自分の気持ちに後になって気づくことが多い	.54	.29	.71	2.64	(.89)	.51	.53
6. 私は、自分のダメなところを見たくない	.52	.27	.72	2.64	(.94)	.50	.53
累積寄与率(%)	38.6					38.6	38.6

なかったため総合的に判断することとした。はじめに全対象者で主成分分析を行ったところ，第一固有値は2.70，第二固有値0.98で一つの主成分が抽出された。結果を各項目の記述統計と尺度全体のI-T相関と共にTable 1に示す。負荷量は.77—.52の間であった。学生と社会人の群ごとの負荷量はそれぞれ.81—.50の間，.74—.53の間であった。

次に，確認的因子分析によって一因子構造の適合度を検討した。適合度はX^2=69.25，*df*=14，*p*<.001，CFI=.938，GFI=.975，AGFI=.950，RMSEA=.071，AIC=97.250であった。ただし，この尺度は先行研究で2因子が見出されていたため（植松・橋本，2014），2因子構造の適合度を確認したところX^2=227.79，*df*=14，*p*<.001，CFI=.761，GFI=.935，AGFI=.869，RMSEA=.140，AIC = 255.794となり，AICの比較から，一因子構造を採用するほうが良いことが分かった。

さらに，異なる母集団による因子パターンの不変性を検討するため，豊田（2007）を参考に，属性（大学生・社会人）および性別（男性・女性）による多母集団分析を行い，因子構造を確認した。4群で因子構造は同じだが因子負荷量が異なることを想定した配置不変モデルの適合度を検討したところ，X^2=201.00，*df*=85，*p*<.001，GFI=.965，AGFI=.954，RMSEA=.030，AIC=255.033，さらに因子構造だけでなく因子負荷量が群間で同じであると想定した測定不変モデルはX^2=213.75，*df*=95，*p*<.001，GFI=.931，AGFI=.963，RMSEA =.030，AIC=255.746であった。モデルを比較する際に用いる指標AICの比較からは，わずかだが配置不変モデルの方があてはまりが良いことが分かった。

信頼性の検討

悩みへの否定的構え尺度の内的整合性はα = .73であった。さらに，対象者のうち任意で再調査に参加を募り，大学生49名，社会人名56名の計105名を対象に，初めの調査から1ヶ月後に悩みへの否定的構え尺度のみ再検査を実施した。再検査信頼性としてピアソンの信頼性係数を分析したところ，*r*=.61（*p*<.001）と中程度の正の相関が見られた。また，2回の調査における級内相関係数は，ICC（2, 1）=.60（95%CI=.46—.71）であった。また各平均尺度得点（1回目：*M*=2.53(*SD*=.43)，2回目：*M*=2.50(*SD*=.52)）について反復測定による差の検定を行ったが，有意差は検出されなかった（*F*(1,104)=.381, n.s.）。各項目に対するI-T分析（Table 1）において特別に値の低いものはなく，本尺度は許容範囲の整合性が確認されたといえる。

Table 2　悩みへの否定的構えと心理学的心性、悩み体験各要因との

	全体	大学生	社会人
心理学的心性尺度			
関心	− .20 ***	− .26 ***	− .15 *
洞察能力	− .44 ***	− .42 ***	− .44 ***
悩み体験スケール			
悩み距離・保持	− .29 ***	− .29 ***	− .29 ***
悩み肯定・積極	− .17 ***	− .21 **	− .18 *

注. *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 3　性別と属性（大学生・社会人）による2要因の分散分析

	大学生（n=280）						社会人（n=498）						主効果（F値）		交互作用
	男性（n=80）		女性（n=200）		総計		男性（n=238）		女性（n=260）		総計		性別	属性	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
悩みの構え	2.52	(.60)	2.57	(.58)	2.55	(.58)	2.39	(.52)	2.38	(.55)	2.38	(.53)	.16	12.90 ***	.37

注. **p<.001

妥当性の検討

構成概念妥当性を検討するため，全対象者，および大学生，社会人ごとに悩みへの否定的構え尺度と心理学的心性，および悩み体験スケールの下位要因との相関を検討した。これらの下位要因と本尺度は，負の相関が仮定されていた。結果，心理学的心性の下位要因「関心」および洞察に関わる能力を測る「洞察」，また悩みの体験スケールの下位要因「距離・保持」および「肯定的態度・積極的関わり」のすべての要因との間に，有意な負の相関が明らかになった（Table 2）。

性別と属性による検討

悩みへの否定的構え尺度について，対象者の性別および属性（大学生と社会人）を要因とする２要因の分散分析（ANOVA）を行った。結果，主効果は属性のみであり（F(1,773)=12.90, p<.001），大学生（M= 2.55(SD=.58)）よりも社会人（M=2.38(SD=.53)）の方が悩みへの否定的構えが有意に低いことが分かった。性別の主効果および交互作用は有意ではなかった（Table 3）。

Ⅳ．考　察

本研究の目的は，「悩みへの否定的構え尺度」について，信頼性と妥当性を検討することであった。因子構造については，一因子性が確認された。先行研究では２因子が確認されていたが信頼性はあまり高くなく，２因子構造が安定していたとはいえなかった（植松・橋本，2014）。多母集団因子分析からは，測定不変モデルに比べてわずかに配置不変モデルの適合度が良く，大学生，社会人各群での因子負荷量の違いについては今後も注意深く検討していく必要があるといえるが，各母集団に共通して一因子構造のモデル適合のほうが妥当であることが分かった。さらに内的整合性の値と再テスト法による再現性から，非常に高いとは言えないものの，尺度の信頼性は許容範囲であると考えた。

妥当性の検証として，「心理学的心性尺度」と「悩み体験スケール」との相関を分析したところ，本尺度と各尺度の下位要因は全て有意な負の相関が明らかになった。本尺度が示すような悩みへの否定的な認識は，心理学的心性における自分の感情や心理的過程に対する関心とそれを検討する洞察の低さ，また悩み体験スケールで測っている，適切な距離を持って悩みを扱うことや，悩みを肯定的・積極的に捉える傾向の低さを反映すると考えられる。これにより本尺度が，悩むことを良くないものと考え，抑えたり避けたりする特徴を明らかにできる尺度として利用していけると考え

る。

心理学的心性尺度は「関心」,「洞察」とも女性の方が男性より高く，その理由として日本社会の性役割の影響が考察されている（Takagishi, 2020）。「悩みへの否定的構え尺度」でも同様の結果が予測されたが，大学生および成人のいずれの群でも性差は明らかにならなかった。心理学的心性は悩みだけでなく,「自分の気持ち」や「自分の感情」のように，より中立的な観点の心理的過程を対象としているが，本尺度で扱う「悩み」は心理的過程のうち否定的な側面に焦点を当てている。すなわち自分の悩みや辛さを良くないものとし，自己の否定的な一面と考える傾向は，男性らしさ，女性らしさといった性役割を問わない個人の特徴として考える必要があるのではないだろうか。

また，属性による検討では，社会人の方が大学生よりも有意に低い値を示した。対象となった大学生の平均年齢はおよそ 20 歳，社会人の平均年齢はおよそ 40 歳である。20 代前後の若年者ほど，自分の悩みを必要以上に軽視したり，否定的な観点から回避的になりやすいといえる。そして以前から大学生に「悩まない」,「悩めない」傾向が指摘されてきた背景に，こうした否定的な悩みの捉え方が関係している可能性がある。またこの結果から，援助要請を促進しようとする場合，年代によって異なる介入の必要性が示唆される。例えば，大学生には自分の悩みのような心理的過程を把握し，直視させるような介入は嫌悪・回避され，心理相談を逆に遠ざける可能性がある。一方で，成人の場合はこのような自己の辛さや負担，悩みの認識を促す介入が自己理解を促進し，心理相談に繋がりやすくなる可能性がある。

本研究の課題と今後の展望

本研究で検討された尺度の安定性は中程度であり，因子構造については今後も様々な年代で検証し，尺度の信頼性・妥当性の検討を高めるためのさらなる検討が求められる。特に，本研究では大学生と社会人の年代による違いを明らかにしたが，今後，学童期，思春期，高齢者など本研究では扱えなかった他の年代との比較を通して，否定的な悩みの捉え方に年齢による違いがあるのかを明らかにし，さらに援助要請行動ならびに心理的支援の継続との関連を検討することが，各年代の特徴を踏まえたアウトリーチ対策の方針を考えるうえで重要であると思われる。

また，本研究では，なぜ悩みを否定的に認識するようになるのかという背景を探ることはできていない。否定的な悩みの構えには,「悩み」や心理的負荷に対する個人的な価値観が反映されている可能性がある。例えば，日本人留学生はアメリカ人大学生と比較して精神障害等への偏見が高いことが指摘されており（Matsuda, Hayes, Twohig, Lillis, Fletcher & Gloster, 2009），精神疾患に対するメンタルヘルスリテラシーの問題が，自分自身の悩みの捉え方にも関係している可能性がある。よって今後，否定的に悩みを捉えるようになる背景要因を探索することが重要であると思われる。特にインタビュー調査など質的な研究によってその理由を明らかにすることで，否定的な悩みの捉え方を軽減していくためのアプローチについても，探求していく必要があるだろう。

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました皆様のご協力に心より御礼申し上げます。これまでご助言をいただいてまいりました橋本和幸先生（了徳寺大学）に深く御礼申し上げます。また，本研究は 2021 年度ルーテル学院大学学内研究助成奨励金の支援を受けています。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

Appelbaum, S. (1973). Psychological-Mindedness: Word, Concept and Essence. International Journal of Psychoanalysis, 54, 35-46

Beitel, M., Ferrer, E., & Cecero, J.(2005) Psychological mindedness and awareness of self and others, Journal of Clinical Psychology, 61, 739-750

Cônte, H., Rtto, R., & Karasu, T. (1996) The Psychological Mindedness Scale: Factor Structure and relationship to outcome of Psychotherapy, Journal of Psychotherapy Practice and Research, 5, 250-259

Czyz, E. K., Horwitz, A. G., Eisenberg, D., Kramer, A., & King, C. A. (2013) Self-reported Barriers to Professional Help Seeking Among College Students at Elevated Risk for Suicide, Journal of American College Health, 61, 398-406

Gulliver, A., Griffiths, K. M., Christensen, H., Brewer, J. L. (2012) A systematic review of help-seeking interventions for depression, anxiety and general psychological distress, BMC Psychiatry, 12, 81. Retrieved from https://doi.org/10.1186/1471-244X-12-81(2021 年 11 月 7 日）doi: https://doi.org/10.1186/1471-244X-12-81

Hall, J. A. (1992) Psychological Mindedness: A conceptual model. American Journal of Psychotherapy, 46, 131–140

木村 真人・梅垣 佑介・水野 治久（2014）.「学生相談機関に対する大学生の援助要請行動のプロセスとその関連要因――抑うつと自殺念慮の問題に焦点を当てて――」『教育心理学研究』, 62, 173-186

木村 真人（2017）悩みを抱えていながら相談に来ない学生の理解と支援――援助要請研究の視座から――. 教育心理学年報, 56, 186-201

厚生労働省(2019)「自対策白書(令和元年版)」Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jisatsuhakusyo2019.html（2021 年 11 月 7 日）

厚生労働省(2020)「自殺対策白書(令和 2 年版)」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jisatsuhakusyo2020.html（2021 年 11 月 7 日）

水野 治久・石隈 利紀（1999）「被援助志向性 , 被援助行動に関する研究の動向」『教育心理学研究』, 47, 530-539

McCallum,M., & Pipere, W. E. (1997) Integration of Psychological mindedness and related concepts. In McCallum,M., & Pipere, W. E. (Eds.), Psychological mindedness: A contemporary understanding(pp. 237-258). Mahwah: Lawrence Erlbaum.

Matsuda,A., Hayes,S., Twohig,M., Lillis,J., Fletcher, L.,&Gloster, A.(2009) Comparing Japanese International College Students' and U.S. College students' Mental-Health-Related Stigmatizing Attitudes. Journal of Multicultural Counseling and Development, 37, 178-189.

Nyklíček, I., & Denollet, J.(2009) Development and evaluation of the Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM). Psychological Assessment, 21, 32–44.

王 傑・王 帥・黄 文哲・藤森 宏明・日下田 岳史・谷田川 ルミ（2016）「中退者調査」平成 27 年度文部科学省大学改革推進委託事業『経済的理由による学生等の中途退学に関する実態把握・分析等及び学生等に対する経済的支援の在り方に関する調査報告書』東京大学, 229-259

小田 友子（2000）「青年期における悩みの主観体験化に関する研究――「悩み体験スケール」の作成を通して――」『人間性心理学研究』, 18, 117-127

佐藤 宏子（2019）「『支援を必要としながら相談に訪れない学生』に対する支援のあり方――人知れずキャンパスを去っていく学生をなくすために――」『大学アドミニストレーション研究』, 10, 16-29

下山 晴彦（1994）「『つなぎ』モデルによるスチューデント・アパシーの援助――悩めないことを巡って――」『心理臨床学研究』, 12, 1-13

鈴木 健一（2010）「学生生活への適応」日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会（編）『学生相談ハンドブック』学苑社, 41-47

Takagishi, Y. (2020) Factor structure, validity, and reliability of the Japanese Version of the Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM), Japanese Psychological Research, 62, 56–64. doi: 10.1111/jpr.12245

高岸 幸弘(2014)「臨床場面における Psychological Mindedness 概念の今日的意義」『関西国際大学研究紀要』, 15, 69-79

豊田 秀樹（編著）(2007)『共分散構造分析――AMOS 編――』東京書籍

植松 晃子・橋本 和幸（2014）「悩みの捉え方の特徴と心理相談への関心――大学生に対するアウトリーチ対策を検討するⅡ――」『日本心理臨床学会第 33 回秋季大会発表論文集』, 415

内田 千代子（2010）「21 年間の調査からみた大学生の自殺の特徴と危険因子：予防への手掛かりを探る」『精神神経学雑誌』, 112, 543-560.

Vogel, D.L., Wester, S.R., Wei, M., & Boysen, G.A. (2005) The role of outcome expectations and attitudes

on decisions of seek professional help. Journal of counseling psychology, 52, 459-470.

Appendix 1 各要因の記述統計

	大学生(n=280)				社会人(n=498)				総合	
	男性		女性		男性		女性		(n=778)	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
悩みの構え	2.52	(.60)	2.57	(.58)	2.39	(.52)	2.38	(.55)	2.45	(.56)
心理学的心性										
関心	17.21	(4.39)	16.39	(4.83)	16.17	(5.21)	17.01	(5.13)	16.64	(4.95)
洞察能力	16.19	(5.34)	16.12	(4.59)	17.33	(5.58)	18.23	(5.18)	17.06	(5.19)
悩み体験										
距離・保持	3.57	(.73)	3.29	(.71)	3.51	(.61)	3.43	(.61)	3.43	(.67)
肯定・積極	4.09	(.72)	4.21	(.61)	3.95	(.66)	3.94	(.70)	4.04	(.68)

An Examination of the Reliability and Validity of the “Attitudes Regarding Own Worries Scale”

Akiko Uematsu　Eriko Takaki

We developed the Negative Attitudes Regarding Own Worries Scale to assess factors related to perception of individuals’ psychological processes, and examined the reliability and validity of the scale. The scale assessed difficulties in recognizing a person’s worries and the negative perception of worries. University students (n = 280) and adults (n = 498) responded to the reseach. These responses were analyzed using exploratory and comfirmatory factor analisys, and multi-population factor analysis, which confirmed the one-factor structure of the scale. The adequate reliability of the scale was confirmed by the internal consistency and the test-retest reliability of the scale. Furthermore, the scale's construct validity was assessed by the Psychological Mindedness Scale and the Experience in Being Worried Scale. The overall results indicated that this scale is valid for identifying attitudes about a person’s worries. Finally, the limitations and future research directions are discussed.

Keywords: student counseling, attitudes regarding own worries, seeking professional psychological help, reliability and validity